



小田実全集（小説 第11巻）

羽なければ



講談社
小田実全集
Makoto Oda



羽
な
け
れ
ば

羽なければ、空をも飛ぶべからず。龍ならばや、雲にも乗らむ。

また、ふもとに一の柴の菴あり。すなはち、この山守が居る所なり。かしこに小童あり。ときどき来たりてあひとぶらふ。若^{もし}つれづれなる時は、これを友として遊行す。

鴨長明『方丈記』

だいがまえのことになりますけど、岡本が死にましてん。岡本いうたかて、胃ガンで死にはった東洋電器の会長はんのことやないでっせ、岡本喜三郎はんのことやったら新聞にも出てたし、そうでのうても有名人やからようけ知ってる人はりまっしゃる。お葬式にえらいさんがみんな車で駆けつけたよつて大阪市内はえらい交通渋滞や。そないに夕刊に書いてありました。

わてが今言つてんのは、そんなえらい岡本はんのことやあらへん。わての昔の仲間の岡本勝七のことや。わてと岡本とは昔ずうつと大造造船でいっしょに働いて、終戦後、やつぱしあれは魔がさしたんですやるな、べつに二人で相談したわけでもしめしあわせたわけでもあらしまへんのやけど、もうこんな鍋や釜やお寺の釣鐘なんかつくつてる工場なんかには見込みあらへん、それよかいつそ闇商売でも始めたらどうやというわけでやめてしもうた、そんな仲ですがな。そんなこと言つてみたところで、岡本のことなんか誰も知りはらへんやる、これが何年もまえのことやつたら、桃谷駅前「ひばりや」いうちよつと大きなスーパー・マーケットがありますな、あその庶務主任してたいいうことで、すさかい、そのころ死んでたら、お葬式にも「ひばりや」から若い男や女の子がようけ来てにぎやかなことやつたるうけど、卒中で倒れてそのあともちろんお店もやめて一年寝たきりで最後の発作をおこして死によつたいうんですから、そうはいかしません。それでも大きな花環だけは「ひばりや」の

社長はんから来ていたし、香典のほうも店員はんが一人百円あて集めはったのを会計の女の人がとどけに来はったりして、やつぱし、岡本は運の強い男や、いつでも得するようにできてるお人や、とあとで聞いてつくづく思いましてん。

あんな大きな花環が来たところを見ると、岡本はほんまに主任はんでしたんやろな。ずいぶん見栄つぱりの強い男で、平気でウソもつきよったけど、あれはやつぱしほんとでしたんやろ。最後に会ったのは五年前で、わてが新世界の通天閣のま下にテント小舎みたいなストリップ劇場がありますな、あそこので男と女がからみあつてどごがどうなっているのかよう判らん看板見てボンヤリしてましたら、肩叩く人がいよる。ふり返つてみたらそれが岡本で、あとからひとりになって考えてみたら、岡本もわてと同じで、何ぞ家のなかでクソ面白うないことがあつてあんなところまでひとりでフラフラ来よつたんでつしゃろ、そやけど見え坊の岡本のことやから、そんなことはオクビにも出しよりません。景気のいい顔で、久しぶりや、どや、いっしょに飯でも食おか。わてもそう来ることは判つてましたから、先手をつつて、あんさんがおごるんやで、なにしろ、あんさんはまだ現役や、現役のパリパリや。わてがそないに言うつと、現役や、現役やてうまいこと言いはる、そんなこと言うつたら、おたくがてまだ働いてるんやから現役やで、といつても岡本は、口だけは不服そうに言いよるんやけど、そんなのは口先だけのことで、顔のほうはうれしそうに笑うてはるのや。アホくさ、学校の小使が現役やつたら、世界中の老人はみんな現役や。わてがそないに言い返すと、ま、うるさいこと言わんと、いっちょ行きまひよ。それで早速「ふぐ助」へ行きましたんや。あのテレビの、凸凹コンビで「超格安ぶぐ、ふぐ、ふぐ、ふぐはふぐでもふぐのふぐ助」いうけつたいな「マーシャル」やつてはるのがあ

りますやろ、あれです、あそこへ行きましたんや。三百人入るいう大広間でてっさとてっちり食べましてな。岡本はモツ焼きもあぶつてもろうて食べてはりましたけど、わてより三つ上で、もうそのときで六十五でっせ、よう入るもんですわ。あんなもん食べたよつて卒中になつたんとちがいますか。ガンがこわい、ガンがこわいいうて、そのときもあらかたそんな話で、サルノコシカケとか海亀の脂を全身にぬる療法とか、日本に来て吉田はんにもこうて再軍備せ工、再軍備せ工、言うて行きはったダレスいう人がいますな、その人がやつぱしガンにやられてたそつですが、そのダレスはんのこととか、岡本は昔からも知りて通つてた男ですけど、まあ、びっくりするぐらいよう知つてますのや。わてに言わせると、あの人、ガンがこわい言うてはつたけど、ほんまは自分はガンにかからへん思つてはつたんとちがうやろか。ほんまにこわいんやたら、あんなにわざわざ調べることもないし、一生懸命、しゃべりまくりはることもない。わてはほんまにガンがこわい。そやよつて黙つてますのや。ガンの話するだけで、ガンがからだのどこかにでけるような気になりますんや。それで、そのときも黙つて、聞き役にまわつてフン、フン言うてたんですけど、まあそのうちガンの話のタネもつきて、それからおきまりの家族の話ですわ。息子と娘と婿と嫁はんと孫の話　おたがいのつれあいの話は岡本もわてもどつちももうなくなりましたからしませんのですけど、だいたい、家族、身内の話となると、悪口でっしやる。まあ、グチの言いあい、聞きあいいうところですな。そのグチの言いあい、聞きあいのなかに、おたがいののろけ、自慢、見栄いうようなもんもたいがい入つていますので、そんなことここでわざわざ言つほどのことありませんな。そのうち何気ない口調で、岡本が、今度庶務主任にしてもらたで、と言いました。あとから考えたんやけど、ほんま

はそのことをもつとはよう岡本は言いたかつたんでしたんやろうな。もつとかんぐつたら、「ふぐ助」へわてを連れて行ったんも、それ言いたかつたんやからとちがいますやるか。「ふぐ助」いうところがなんぼ安いうたかて、二人で食べたたら千円は飛びます。そやよつてそれぐらいの功德はさしたげないかんと思つて、わても、そりやよかつたなア、辛抱のしがいがあつたなア、とくり返して言つてあげたんですが、ほんま言つと、片方で、何や、「ひばりや」みたいな吹けば飛ぶような店の主任になつていばることないやないかと思ひながら、ちよつとらやましい気がしたのも事実で、わても岡本みたいに桃谷駅前の「江戸前にぎり十円ずし」に店の女子衆おなごを入れ代り立ち代り連れて行きたいような氣持になつたんですがな。岡本は大都造船で工長になりはつたけど、わては副工長どまりで主任はんみたいなもんになつたことあらしません。

さつき岡本の葬式のこと言いましたけど、ほんまはわてはその葬式見てへんのです。一日目をまちがえて、葬式のある日、岡本の家へ行くいういかにもグツのわるいことになつてもうたんやけど、それは岡本あつ子がわてにそないに言つたからで、まったく岡本あつ子いう女、いや、女の子ははじめからわけの判らん変な女子おなごでした。

岡本が死んだいうて知らせに来たんは岡本あつ子でしたんや。わては岡本の知り合いやいうても二年が三年に一度道でバツタリ出会うくらい仲やつたから、会えば家族、身内の自慢話、グチ話やらをしますけど、ほんま言つたら、岡本の奥さんには昔会つたことありますけど、子供や孫のことになると、名前は聞いていても知つてるのは一人もいません。それはおたがいさまで、岡本かつてわての子供、孫に会つたことありませんやるけど、忘れもしません、まだ九月のはじめの暑い日の夕方、家

族でみんなしてテレビ見ていたら、玄関で何やら話声がして、誰ぞ来イはったんかと思つたら、孫の健志がけつたいな顔してわたのどこに来て言いますんや。何や知らへんけど、白ブタみたいな女の子が来ておじいちゃんに会いたい言うてるねん。誰や？ 誰や知らん。とにかく会いたい言うてきかへんねん。名前訊いたんか。岡本とかいうた。岡本あつ子。おじいちゃん、そんな女の子知つとるの？ 茂一と嫁の元子が健志よりもつとけつたいな顔をしてわたを眺めるものやから、わてはしようことなしに立ち上つて玄関へ行きましたんですけど、そこには誰もいやしまへん。へんやなと思つて外へ出てみると、塀のきわのところ、セーラー服の女の子がしゃがんで泣いていますんや。どないしはつたん、と訊くと、急に立ち上つて、柏木のおじいちゃんですか、うちのおじいちゃんが今朝死にました、と舌足らずの甘えた声で言いよるんです。

あとで岡本あつ子に言わせたら、わてはえらく素気なく、あ、そうでつか、と言い、まるで岡本の死ぬのをまえまえから待つてたような口をきいたと言いよるんやけど、まさかそんなことはおまへん。ただ、この年になると、もう人が死ぬいうことに不感症になつてみたいなところがありますな。もう慣れてますのんや。明日はわが身やないか、いちいち悲しんでいられるもんかいな、と岡本がいつか強がりて言うてましたけど、たしかにそんな気持ちがある。そやけど、一方で、それこそ明日はわが身やありませんか、知り合いの死いうもんは若いときとちこうて、悲しいというよりもつとからだのシンにまでひびいて来る感じでこたえよる。それでかえつて、そんな素気ない口のききかたになるのか判れしまへんのやけど、十六歳高校二年生の女の子にそんなことの何が判りますか。もつとも岡本あつ子も岡本あつ子のほうで、わてが、おまえかてなんや甘えた声で、おじいちゃんは死に

ました、と言つたやないかと言ひ返すと、おじいちゃんは判つてへんな、うちの甘えた声は生まれつきでどうもならへんし、うちはほんまに悲しかったんや、と口をとがらせて怒つて言いよりますねん。その「あ、そうでつか」のあと、どれくらいの時間、わてと岡本あつ子は立話してましたやろつ、五分とかからへんかつたんとちがいますか、葬式の日どりのことなんかはいずれ正式に明日か明後日には通知のハガキがきますけど、これこれの日どりと時間、場所は自宅、というぐあいに、こちらが感心してしまうぐらい岡本あつ子は手ぎわよう話して行きましたんやけど、その日どりが一日ちがつていましたんです。時間と場所は同じでしたんやけど、日どりが一日おくれ。

ハガキでもついていたならそないなことになるしまへんのやつたけど、そのハガキが来ませんのや。岡本あつ子に、おまえんとこでちゃんとわてあてにハガキ出したんかとあとで問いつめると、出したで、つけへんのは郵便局がわるいんや、とこうですがな。わての想像では、岡本あつ子がわてあての通知のハガキをわざと抜きとつてすててしまったような気もするのやけど、どうでっしやるな。そんなこと言い出したら、岡本あつ子は、そんなにまでおじいちゃんはうちのことうたごうてはるんか、と言つて泣きじゃくり始めるのにきまっています。それでわてはいつも黙つてしまふのやけど、ほんまを言つと、そうとちがいますか。

おかげで、えらい恥かいてしもうた。岡本の長男、岡本あつ子の父親の定吉はんというのが喪主でしたけど、長男いうんはみんなあないになりますのやるか、うちの長男の茂一そっくりの不愛想でかた苦しい男で、今ごろ何しに来た、というような眼でわてをじろじろ見る。苦しみはりましたか、と訊ねてみて、そんなことあらしまへん、ポクリといきよりましたんや、ととりつく島もないですな

ん。早々に引き上げましたんやけど、お骨のおいてある横で赤ん坊がシキミの小枝を口にくわえて這うていたり、畳の上に香典袋や大丸の包紙が散らばっていたりするのはわてのうちそっくりで、まあ一口に言ったら、岡本にとつて決して住み心地よい家でなかったということでもっしゃるな。小そつなつて暮していたんとちがいますか。わてはうちでは玄関わきの三畳をもちつてそこがいちおう「おじいちゃんの家」ということになってますけど、それは茂一や元子に都合のええときだけそつなるだけのこと、要するに孫の遊び場ですがな。子供にだけオヤツやらないかんよつになると、元子が、おじいちゃんの家やないの、みんなこつちへ来て、言つて号令かけますのや。

わては岡本の長男の氣むずかしい顔見ているうちに、ふいに訊きとつなつて、

「定吉はん、岡本はんの病室はどちらでしたんや。」

「病室いうて……」

定吉はんは、何や火星から来た人でも見るような眼でわてを見てから、ああ、と自分で自分にうなずいて、

「そんなんべつにありませんがな。みんないっしょにいましたんや。そのほうがさびしいですやろ。」
うまいこと言いよるなと思ひました。さすがに頭のええ岡本の長男のことや、うちこの茂一やつたらそつはいきまへん、きつとへま答えよつたと思ひます。柏木君は実直で真面目やけどバカ正直で困りますねん、という噂を、いつやつたか、うちへ来た会社の同僚の人から聞いたことがありますがねん。そんなことで、北浜のちつぽけな証券会社でもまだやつと係長になれたということですねんやろ。あとで知つたことやけど、定吉はんは薬品販売の会社の課長代理してはるいうことでした。あんまり名前

聞いたことのない会社で、その課長代理やからどちらにしても茂一とあんまり変らんパツとせん感じですけど、そのときはえらいやり手はんに見えたんですがな。

そやけどいくらうまいこと言いよるいうたかて、そんなふうにつまいこと言われて、病気になるってもいっしょくたに住まされていた岡本の身になつてみなはれ。いつやつたか、うちではワサビくわしてくれへんねん言つてグチを言つてたことありました。子供が嫌いやし、毒になるいうて、岡本の家では、いや、あの定吉はんの家では、刺身食べるときかてワサビ抜きで食べはるいうこととせ。岡本あつ子かて、おかげでワサビ抜きで刺身食べよるんやけど、わてにまでそないさせようと思つて大變でした。そうせんと泣き出しよるんですがな。からだにわるいよつてワサビ抜いて食べて、うるさいほど言いよつて、わてがきかへんなんだら、おじいちゃんのこと思つてこないに言つてんのに何やと言つて泣きますんや。岡本は、うちではワサビ抜きで刺身食べさせられとつたんで、そいで、あの人、あんなとつかえひつかえ「江戸前にぎり十円ずし」に「ひばりや」の女子衆おなこ連れて行きはつたんかも知れん。

とにかく定吉はんはとりつく島もあらしまへん。早々に引きあげることになりましたんやけど、気にかかるのは、岡本あつ子が日どりを一日ちがえて教えてくれたことで、わても少し腹を立てたもんですから、こないだお宅のお嬢さんが来イはつて知らせてくれはつたんやけど、と率直に苦情を言いましたんや。そしたら、定吉はんはまたたまたまげたような顔でわてをつくづくと見て、

「それ、ほんまでつか。うちのあつ子に柏木はんのとこへ行けいうて何も頼んだおぼえあらしまへんやけど。」

第一、うちのあつ子をまえまえからご存知でしたんやるか、と定吉はんはキツネにつままれたような顔で、わてに訊き、わてはわてでびつくりして、こないだはじめて会いましたんやけど、と答える。そのうちそんな押し問答ではラチがあかんいうわけで、とうとう二階にいたあつ子を呼びまひよ、ということになったんやけど、それで余計ややこしいことになった。わては岡本あつ子がずつと二階で耳をすましてわてらの話をぬすみぎきしていたにちがいないと思ひますのやけど、とにかく、岡本は死ぬ二日か三日まえ、あの子がちよとどそばにいるときに急にことばが言えるようになって、わての住所と名前を言つて、死んだらそこへまず連絡してくれ、おまえが直接行ってやつてくれ、と頼まれたというんですな。

信じられん話ですわ。定吉はんも同じ思ひやつたらしく、

「その話、ほんまか。」

とくり返して訊ねはつたんやけど、岡本あつ子はどないにくり返してみたところで、

「ほんまや。……ほんまやで。」

そんな押し問答をいつまで聞いていてもしょうがないし、もうええかげんおそろもなつて来たんで、わては、それでは今度初七日のときにまた寄せてもらいまっさ、とこんなときのキマリ文句を言つてその日はそのまま帰つてしまいましたんやけど、次の日、学校から帰つて来ると、塀のきわのうすくらがり立っている人がいますのや。誰かと思つたら岡本あつ子で、わてを見たら、ピヨコンと頭を下げよる。それから、こないだのやつな舌足らずの甘えた声で、

「おじいちゃん、お参りに来てもろつてどうもありがとございました。」

いや、そのあと、まだつづけて一人前も二人前ものことを言うんでっせ。

「昨日はおかまいもしませんで、失礼申し上げます。」

こうたてつづけに言われてしまうと、葬式の日どりが一日ちごうてたやないか、というセリフはどうしても二の次になりますな。それにしても、十六の子供相手に、このたびはゴシユウシヨウサマで、とか何とかつかつめらしい口上を述べたてるのもけつたいな話やけど、しょうありません。先方さんがそないに言いはるのやよつてと思つて、わてもそんな口きいてましたんや。いつたいこの岡本あつ子という女子おなごは、はじめから年のわりにませていて（それとも、きょう日の女子おなごはみんなあんなふうなんでっしやるか）、岡本が死んだいう知らせをもつて来たときも、わてがお通夜のほうは遠慮させてもらいます、からだのぐあいもよろしいよつて、と言つと、「ウン」と勝手にうなずいて、そうしなさつたらよろし、お通夜なんてもんは柏木のおじいちゃんが知らん人がようけ来てお酒のみはるだけのことやさかい、と変にわたの胸のうちを見すかしたようなことを言いますんや。はじめから妙になれなれしく柏木のおじいちゃんと言つてみたり、そうかと思つと大人ぶつたよそ行きのことばを急に使い出したりして、ややこしいかぎりですわ。

まあそんなそれこそよそいきのやりとりをしているあいだにころあいを見はからつたみたいに、岡本あつ子がまたけつたいなこと言い出しよつたんです。あつ子はいつでもそうなんやけど、ま、なんちゆうたらええか、要するに今のことはでいうたらタイミングちゆうもんがよろしますねんな、機嫌よう世間話なんかしてますやる、こつちもそないな気になつて相手してますと、突然、こつちの胸がとまつてしまつようなことをべろつと言い出しよるんです。

「あんなア、柏木のおじいちゃん、教えたげよか……」

いつでもそのセリフから始まって、それから本文や。それを少し声をおとして秘密めかして言いますねん。

「柏木のおじいちゃんには葬式のあと一日おくれて来てもらおうように言いはってん。」

「……誰が言いはってん？」

「おじいちゃんやがな……うちこの死んだおじいちゃん。」

そんなことだしぬけに言われたら誰かってびっくりしますやろ。わてが思わず、

「何でや。」

と言つと、もうそんなことをわてが訊ね返すいうことくらいあの子には判ってるんでっしやるな、ふつの子やったらわてがにらむと顔をそむけたりするもんですが岡本あつ子はそんなことしまへん、平気でわてをゆっくり見返して気をもたせるようにしてから、あっさり、

「知らん。」

と、こつや。

わてが拍子ぬけもし、何やら小娘にバカにされたような気になって黙っていると岡本あつ子はやっぱり人の顔色見るのが上手な女子おなにしですな、岡本が死ぬ二、三日まえにわてにじかに知らせるように頼んだとき、そのこと 葬式の日あとに来てもらうことも頼んでいたと、えらく神妙な声で言います。そればかりやあらしません、へんに分別くさい顔で、そのほつがなア、柏木のおじいちゃんにしんみりお参りしてもらえろと思つたんかも知れまへんで、とつけ加えよるんですがな。

「ほんまにあんたはんのおじいちゃん、そないなこと言いはったんか。」

わては、ウソぬかしたら承知せえへんぞ、というふうな顔でにらみつけてやりましたが、あの子はそんなことやったって平気ですな、わてをまたまっ正面から見返して、いつもの甘えた口調ながらいやにハキハキした口ぶりで、

「ほんまや。」

「ほんまにほんまか。」

わてはもう一度訊いてやりましたんや。そしたら、また「ほんまや」と言い返すと思つたら、もうそないに言いようしません。

「ほんまかウソか、どない思いはったって、柏木のおじいちゃん自由やけどな。」

と、それこそ逆にウソついているのがわてみたいにくわい眼でまっすぐにわてをみつめよるんですが、それからひよいと、これもまたわてをびつくりさせるようなことを言いよった。

「柏木のおじいちゃん、うちはおじいちゃん好きや。」

それだけ言つと、もうそれで言いたいことはみんな言つてしまつたというような晴れ晴れした顔で、

「サイナラ、また来るわね。」

と言ひ残して、そのまま歩き出しよつたんです。こつちは何にも言つことあらしまへんがな。それでも、

「サイナラ。」

と言つたあとで、あの子の口ぐせが移つてしまつたんでつしやるな、

「また、来なはれ。」

とわては言つてしもつた。

二

それからですがな、三日に一度は岡本あつ子がわてのところへやつて来るようになったんは。はじめは堀のきわのうすくらがりなかにわての帰るのを立つて待っていてそこで立話をしてたんですけど、肌寒うもなつて来よるし、まるで高校生の密会みたいやしと思つて、わてのうちにあげてやることにしましたんやけど、そうなつて来ると、元子や元子の子供、つまり、わての孫だんな、そんな連中が黙つてしまへんがな。かわいげのある女の子やつたらまだええんやけど、岡本あつ子いうたら、肌色が白いだけがとりえみたいな、まったく白ブタみたいな女子おなこやし、わてといるといゝんなこと話したり笑つたりしよるんですけど、ほかの人にむかうと、ブスツと黙つているか、ええ人にはええでつしやるが、嫌いな人には神経を逆なでされるような気になる舌足らずの甘えた声で（うち、生まれつき舌が短かいんや、といつも言つてました）自分の言いたいことだけ言つてのけるといふんやから、これはあんまり人に好かれへんのとちがいますか。もつとも、うちの元子や孫やつたら、どんな人が来てもおきませんやろな。よしんば岡本あつ子がスターみたいにきれいな子やつたらそれはそれで今年中学三年生になる一番目の孫の良子なんかヤキモチやいてうるさいことやろし、ひよつとすると元子まで妬んでねちねち言いよるかも知れません。岡本あつ子は美人やなかつたんでかえつてよかつたのかも知れません。それで、なんやあんな白ブタ、いうぐらいですんでますんや。

あれやこれやで、岡本あつ子はわての学校に来るようになりまして。わてはまだおなさけでうちの

近くの私立女子高校の小使させてもろつてたんですけど、一週に二度、夜八時ごろまでいてあとは夜警の人にひきつぐ日がありますんや。岡本あつ子はまえもつてそんなこと調べとつたんとちがいまするか。なんにも訊かへんに現われるときまつてそのときで、なんやわてのことみんな調べてよるみたいで気味がわるうりましたで。と言つたかて、いつでもわてひとり小使室にいるのやおません。同僚がいたり、先生が遊びに来はつたりしたんやけど、岡本あつ子は平気でした。同僚のほうでも、ずつとわてのお孫さんやと思つてたそうやからのんきなものですわ。あの子が自分でそんなに言いふらしてたらしいんですのやけど、まあ、わざわざ言わへんでも、十六の高校二年生とおじいちゃんのとらあわせではそう思わんほうがどうかしてまつしやる。もうそのころには、わてのことを「柏木のおじいちゃん」とは言つてませんでした。ただの「おじいちゃん」や。そないに言うてるもんやし、そこは、第一、女子高校ですやる。若い女子が学校へ来ても目立つところやあらしません。そやけど、けつたいな女の子やとみんな思つてましたんとちがうやるか。度肝ぬかれた、いうてはつた人もいました。浜坂はんいう今年還暦になりはつた人やつたですけど、わてもそのときいつしよに小使室でテレビ見てましてん。岡本あつ子も黙つて入つて来て、わてと浜坂はんのうしろからテレビ見てましたんやけど、あの子はいつも黙つて入つて来て、わてと仲間に入つてたいいは黙つてたらそこらに散らばつて残りの新聞をよむ、しゃべつていたら仲間に入つてたいいは黙つているがふいに甘えた声でしゃべり出すというふうでしたから、べつに気にもとめんと放つておきましたのや。そしたら、突然、消して、このテレビ消して、なア、消してエな、とまるで泣きじゃくるようにして叫び始めたんです。はじめは何ことがおこつたのやるかと浜坂はんもわても呆然としてま

したんやけど、とにかく、テレビ消してくれいっんでっしやる、それで浜坂はんやったかわてやったか、スイッチに手のばして消しましたんや。

「どないしたんや。」

わてがやつと自分をとり戻してそないに訊くと、もうさすがに泣きじゃくるのはやめてましたけど、「こわかったでエ、おじいちゃん。」

と、まだふるえが来るような顔でわてのからだにピッタリ身をよせて来て言いますのや。

「こわいて、何がこわいんや。」

あんまりフに落ちんことやよつていつもは黙つてはる浜坂はんがたまりかねたように横から口を出しはると、あの子は余計けつたいなことを言いよる。

「三国ジュン子……あの人、こわい人やでエ。」

三国ジュン子いうたら、もちろん、あの流行歌手の三国ジュン子のことで、いつも和服を着て、日本調の歌うたいはるまだたしか二十ま^{はたち}えの娘さんや。あんまり歌はうまいことあらへんし、いつも和服ばかり着てるのはスタイルがわるうて大根足かくすためやと週刊誌に書いてありましたけど、わてにはこのごろのややこしい歌より三国ジュン子の歌のようなしつとり落ちついたのがよろし。スタイルかて、もつさりずん胸でふんわりとおいどのあたりがふくれているというようなんがかえつて性にあつてますねやるな。このごろの女の子みたいに、あっちこち出ばつたりひっこんだりして、手足がいやに細うて長いいうのは、やっぱし、明治生れのわてむきやおまへん。浜坂はんかて、その歌のスター・パレード」という番組で、三国ジュン子が出て来たところでそれまで夕刊を見い見いで

はったんをわざわざ姿勢をなおしてテレビにむきはったぐらいやから、わてと同じ意見の持主とちがいますか。ことばをつづけて、何でこわいねん、とがめだてするようにふり返って言いはったんも浜坂はんでした。

そやけど、それでひるむような岡本あつ子ではあらしまへん。ふり返った浜坂はんをゆつくり見返してから、またけつたいなことを言いよつた。さつきからけつたいな、けつたいないことばばかり使つてるみたいで気がひけるのやけど、事実やからしょうないですがな。

「三国ジュン子いうたらね、小鳥ようけ飼つてはるねん。」

インコ、セキセイインコ、カナリヤ、九官鳥、オーム、十姉妹……あとできいたら出たらめ並べたそうやけど、岡本あつ子はいつもの舌足らずの甘えた声と口調に戻ってゆつくり言いよる。

「それがどないしてん。」

わてが思わず口を出すと、そんな簡単なことがどうして判りはれへんの、というようないらした顔つきになって、

「こないだ、テレビのインタビューに出てはってん、そこで小鳥のこと話しはって……」

要するに、ある日、三国ジュン子がソファーに坐ると、下にカナリヤがいて、下敷きになってあえなくオダブツになつたいうんですな。

生き物飼つていやなのは死ぬことですわ、というようなことから話が始まつたらしいです。愛らしさが売り物の三国ジュン子のことやから、小首でもかき上げて、死ぬのはほんとにイヤ、というたんとちがいますやるか。岡本あつ子いうんはなかなか演技力がある子やさかい、泣きながらでもそんな真

似てみせましたんやけど、そのときだけ、白ブタの岡本あつ子が色が白いということだけでも共通しとるさかい色白美人の三国ジュン子に見えたんやから、やっぱし芸の力ですわ。三国ジュン子がそないに言つたら、インタビュする人は無責任なもんですわ、心がおやさしいんですね、というような歯の浮くようなセリフを言いよつたらしい。それで、三国ジュン子が自分のおいどでカナリヤを押しつぶしたという話をしたんでっしやる。

きいているうちにはじめはアホらしい気がして来て、そんなこと何がこわいねん、わてなんか、クレーンの運転の失敗で何十トンというような鋼材の下敷きになった人見たことあるで、戦争中、直撃弾くろつて脳ミソやら内臓やらとび出した死体をあつちこつちで見ることがあるで、と言つたらう思いましたんや。そやけど、これもまたけつたいな話で恐縮ですけど、カナリヤの話、聞いているうちにだんだん気色がわるうなりましてな。こわいというのやあらへんけど、まあ気色がわるいいうんでしょ。うな、あの三国ジュン子のおいどがカナリヤを押しつぶしたと思つたら、ええ気持せエへん。

「なきよらへんかつたんやるか。」

「ないても聞こえへんやつたんやる。きつと三国はん、坐つたままで『夜雨よさめの京極河原町』を歌つてはつたんやで。それで、聞こえへんかつた。」

「……………」

「そんなことようあるんちがう、おじいちゃん。」

そう言いきつてもうてから、岡本あつ子は子供のとき映画館で迷い子になったときのことを長々と話しよつたんやけど、まあ、よくある話でんな、親のほうは子供のありかを知つてたんやけど子供

のほうは迷い子になった、えらいこつちゃと泣きじゃくる。もつとも、岡本あつ子は自分でこういうときには泣きじゃくれば親切な人が必ず出て来るにちがいないと考えてわざわざ泣いてみせた、そやけど、誰もかもうてくれへんので今度はほんまに悲しうなつて泣きじゃくつたいうんですが、あの子やったらそうでっしやるな。

「なんぼ泣いたかて、誰もふりむきもしてくれへんねん。映画が西部劇でなア、大きな音たてて射ち合いしとるねん。」

「それで、どないしてん？」

「どないもこないもあらへん。映画が終つて明るうなるまでそないして泣いていた。」

明るうなつてみたら、両親も兄弟も、みんなつい近くに立っていたというんでっせ。

「薄情な話や、誰もうちの泣き声聞いてくれへんかつてん。悲しかつたし、こわかつた。」

「……………」

「うちなア、そんなとき、世界中でただひとり取り残されたみたいな気がするんや。」

「……………」

「うちなア、おじいちゃんが死にはるときなア、何か言うてはつたんやと思うねん。何や一生懸命言うてはつたんやけど、こちらには聞こえへんかつたんや。」

わては岡本あつ子がそれだけ言うて急に黙り込んでしもつたんでまた泣いているんやないかと思つてあの子の顔を見たんですけど、泣いてしまへんでした。泣かんと眼がすわっていますのや。ギロギロツと眼が光っているんやない、トロツとしずまりかえつてすわっているんですわ。わてはなんや背

筋が寒くなるような気がしましたんやけど、あとできいてみると、浜坂はんも同じような気分になりはったらしい。それに何やらさつきから小娘にひきまわされてるみたいな気にもなったので、わては、「ま、そんなことは世の中によつあるこつちや。」

と話をたち切るようにして言うたんですけど、岡本あつ子はそんなわてのことばはまったく耳に入らんような顔して、わての顔をそのトロツとした眼で見えていますのや。わてもしようないさかい黙って見返してましたんやけど、そのうち、この子かて、カナリヤをおいどの下に下敷きにしたことがあるんやないか、それで、三国ジュン子の話がこんなにこたえたんとちがうやろかと、ふうつと思つたんです。三国ジュン子のおいどは、着物の上からでもよう判りますけど、むっちり肥えて横幅の広いおいどや。べつに見たことあらしまへんけど、そんなことぐらいわてかてダテに年とつてしまへん判ります。岡本あつ子のおいども、発育のええ子で、背丈はあんまり高いことあらへんけど、肉づきがよくてまさに白ブタやから、やつぱし横幅の広いおいどでせ。三国ジュン子のおいどのほうはあなに色の白い美人やさかい、わたしが昔松島でなじみやつた娼妓みたいにまっ白なおいどですやろけど、岡本あつ子のはどうですやろ、やつぱし、かたちはわるいやろけど、色の白のおいどとちがいますか。とにかく、あなに肥えて横幅の広いおいどやつたら、三国ジュン子のおいどにしたって岡本あつ子のおいどにしたって、カナリヤぐらい下敷きにしたって感じませんのやろ。いや、ほんまいつたら、三国ジュン子の話はみんな岡本あつ子をつくり話で、カナリヤを下敷きにしたのは岡本あつ子のおいどで、カナリヤはないてたんやけど岡本あつ子は知らんで、知らんとそれこそ三国ジュン子のヒット曲『夜雨の京極河原町』を歌っていて、それからヒョイと立ち上るとカナリヤが下に冷とう

なっていて、それでどうしようもなくなってしもつてわたの学校にやつて来て、ちょうど三国ジュン子テレビで歌っているのを見て、あんなこと言い出したんやないやろか。

わてがそんなふうに考えたのは、その日の夜、うちへ帰つて寝たあとのことで、夜中ふいにそんな考えが浮かんでとたんに目がさめたんですけど、そのとき、何や大きな声で叫んだような気がしてしょうあらへんのです。何でそんな気がしたかという、誰も起きてくれへんかったからや。それがなんやえらく寂しいことで、たしかに世界中でただひとり取り残されたみたいな感じで、わてはしばらく気色が変わるかった。そのうち、また眠つてしまいましたけど、わては不眠症なんかにかかったことない男で、ふつうは年をとつてからでもよう眠るんです。朝かて、五時や六時に起きるなんてことはできしまへん。放つておかれたら、九時、十時まで眠つてます。ほんまでつせ。元子がいつも子供が真似をして困るいうて怒りよるんです。

それにしても、三国ジュン子、いや、岡本あつ子のおいどがカナリヤを下敷きにしたとき、血は出えへんかったんですのやろか。鋼材の下敷きになった男のときは、血がようけ流れて、あとはコンクリートの床の上に血だまりがでてました。そんなこと、なかつたんですやろか。

血が出ていたら、あのおいどにべつとりとついていたんとかがいますか。はだかで坐つたんやない、スカートはいていたんにちがいないから、セーラー服の下の紺のスカートについたんですやろ。それとも、女学生なんか電車のなかで坐るのを見えますと、スカートがシワになるのを気にしてか、まるでハカマをたくし上げるみたいにして坐りよる人が多いんやけど、あないにして坐ると、白いズローにまっ赤に血がそのままつくんとちがいますやろか。岡本あつ子のズローはもつとあとに

なって見る機会がありましたよってはっきり言えますんやけど、ピンクとか黒とか黄色とかそんな派手で色っぽいモンではあらへんかった。ナイロンの透き通るようなやつやのうて、木綿かガーゼのとかくちよつとも透き通ったりせん白のズロースで、それ見てたらやつぱり女学生やな思いましたん。きょう日は、うちの嫁の元子みたいに四十にもなって、あんな恥かしい派手な色物の透き通るズロースはく時代ですよ。それに岡本あつ子のズロースは新品いうもんやありませんでした。何べんも洗濯してもうええかげんほころびかけていよる上に、何日も替えんとはいているんでっしゃるか、何や薄汚れた白でしたけど、それでも、そこに血みたいな真赤なものがついてましたら白は白で、その白いところに真赤な血や、ドロツとして生まあたかい真赤な血や。

二

鋼材の下敷きになって死んだ男は栗田忠義と言いましてん。なんでそんな四十年もまえに死んだ男の名前なんかおぼえてるんかというと、「忠義」という名前がなんやおかしかったからですね。まだ若いせに禿げていて、まんまるい顔にちんまり眼鼻がついているというような感じで、「忠義」という柄やあらしません。それ、「タダヨシ」と読むんとちがいます、「チュウギ」と読むんや、いうて、栗田と知り合いになるとみんなまずそう言われますんやった。

キツプのいい男でした。腕もええけど、みんなの人気もあって、今度の工長は「チュウギ」はんやとみんないうてましたんやけど、アツという間に下敷きや、ほんまに造船所いうようなところはあぶないところだつせ。

岡本が工長になれたんは、栗田が死んだからやという人がようけいました。岡本は腕はよかつたけど、さつきも言いましたやろ、見栄っぱりでいばつていて、アタマのええことをハナにかけるような男やったからあんまり人気あらしまへん。上の人にはヘイコラして、下にはいばるいう、どこにでもいよる男で、くらがりで殴つたるかとか殴つたとか、そんなこと言つてる人がようけいました。そのうち、酔つたまぎれにじかに岡本に、栗田はんが死んであんたも工長になれてよかつたなア、と言つた男が出て来よつたんです。やにわに岡本はとびかかつて行きましたな。とめる人がそばにいてよかつたものの、おらへんかつたら、どうなつてたか判れしません。昔は造船所の職工いうたら気が荒かつたもんやから、ケンカかてとことんまでやりよつたもんですよつて、そばに人がいてよかつたと思つてますねん。

そやけど、そないに思う一方で、岡本はやっぱし本気でやる気はなかつたようにも思えますねん。アタマのええ人やつたから、そんな男をぶちのめしてそれで警察ザタになつてせつかくの工長ちゆう地位を棒にふるいうようなことはせエへんかつたんとちがいますか。ようアタマが働いてそれくらいの計算なら朝飯まえでした。そやよつて、みんなからは、いやなやつや、ということになつてましたけど。

戦争中、ちよつとボルトやナットをちよるまかして横流しやつたことありますんや。そんなことぐらい、誰でもやつてたことであつせ。べつにわてらだけやあらへん、会社のえらい人なんかになると、鋼材や鋼板まで横流ししよつたんやから、わてらのやつてたことは、何ですなア、まあ子供だましいところであつしやるな。そのときにもいちはんつまいことやつつたのは、わての見るところ、岡本

でんな。うまいこと立ちまわって、ピンハネまでしてよった。

そやけどわてには親切やった。三つ年下の同郷の後輩いうわけですしやるな、気味のわるいくらい親切で、よう世話してくれました。工長にはなれませんでしたけど、副工長いうのにしてもらたんは、岡本がえらい強いこと推薦してくれたからやということでした。岡本は自分でもそないに言いよったけど、ほかの人からも同じ話聞きましたよって、それはほんまの話やと思います。あれやこれやで、わての死んだつれあいの春子というのは人の悪口ばかり言うて暮してる女やったですけど、岡本についてだけは、あんた、あの人に足むけてねたらあかんで、といつも言いよりました。あんた、ひとつもありがたそんな顔してへんやないか、ともよく言うてましたな。もつとも岡本に負けず計算高い女でしたよって、わてらがいつしよに会社やめてしもうて、それつきり別れ別れになつてしもうたあとでは、もう岡本のことなんかまるつきり忘れてしもうたふうで、わてが二年か三年に一度ぐらいどこかで岡本に会つたと言うても、あの人まだ生きてはんのかいな、と言うぎりやった。

「あなたのおじいちゃん、なかなかやり手やったんやで……」

とわてが言いかけると、岡本あつ子はいやに八キ八キ口調でさえぎって、

「いやなやつやった言うてる人がいはりました。」

「誰が言つてはってん？」

「うちのお父さん。」

岡本あつ子は小使室のテレビのチャンネルを勝手にぐるぐるまわしながら顔色一つ変えんと言いはるんですけど、あれはどんなことでしたんやろか。やり手の人は人さまからいやなやつや、と思われ

るねん、と岡本のために言うてやると、

「それでも、いやなやつはいやなやつや。」

と言いつづけよる。孫娘にまでぞないに言われたらと思つとわては岡本が何やかわいそうになつて、とにかく世の中には妬む人が多いよつて、とか、あの人は口が下手でいばつたように見えて損しつたとか、ゴチャゴチャ口上を並べたてると、岡本あつ子は突然クルリとふり返つて、

「おじいちゃんはいええ人やいうて、うちのおじいちゃん何べんも言うてはりましたで。」

「ええ人いうたら、つまり、アホウいうことやる。」

「そんなことあらへん。ほんまにええ人や言うてはつたんもん。」

世の中はキツネとタヌキのばかしあいみたいなものや、この世の中でええ人はほとんどいやらへん、柏木のおじいちゃんがそのほとんどいやらへんええ人の一人や、そのなかでもピカーや、ピカーちゆうのピカーや、うちが死んだらな、柏木のおじいちゃんを自分の代りのように思つて、たよつて行つたらええ。……

「そないにあんたのおじいちゃん言うてはつたんか。」

「言うてはつた。……言うて死にはつた。」

まるで歌うように言いよるので何やら気恥しうなつて、ま、世の中はそんなもんや、うしろからグサリとやられたり、それも親切にしてやつた人にやられたりする、とそこまで言うたら、岡本あつ子がまたわての正面に立ちふさがるような感じでさえぎりよつたんですがな。

「おじいちゃんはそのことしはる人やあらへん。」

わては黙ってましたんや。そしたら、これでもかこれでもかというふうにくり返しますのや。

「そんなことしはる人やあらへん。」

「……………」

「そんなことしはる人やあらへん。」

あれは念を押し出したというよりやっぱし皮肉やったかも知れまへんな。そやなかつたら、あんなけつたいな話をあとつづけてしよらへんかつたんとちがいますか。なんでも、あの子は、小学校時代、あの子をえらくかわいがってくれた女の先生のカバンを近くのドブ川のなかにほり込んでしまったことがあるというんです。その女の先生には親切にしろもうたことはあつても、うらみに思うようなこととは何一つあらへん、どうしてそんなことしたのか自分でもよう判らんのやけど、とにかく気がついてみると、女の先生のカバンをもってドブ川めがけて歩いていて、そのまま、ドブンや。あとで考えてみても理由はもう一つはつきりしませんのやけど、まあ、強いて理由をあげいうたら、親切にしろもろたよつてとちがいますか、と云うて、うちとあんたは一つ穴のムジナや、かくしたつてみな判らんやでというふうには、岡本あつ子はわての顔をじいっと見よるんすがな。そうしておいてから、また、くり返して言いよる。

「おじいちゃんはそんなことしはる人やあらへんけど。」

四

高い足場の上で、ひょいと、岡本の背中に手が伸びそうになったことがありますねん。何でやよう

判れしません。暑うて、お日さんがキラキラしとつたら、頭がふらふらになってと言えまっしやるけど、そんなことはあらへんかった。ええ秋晴れの日で、その足場の上から金剛山と高城山の二つがきれいに見えよつて、岡本がまえを慣れた足どりで歩きながら、わざわざ一度ふり返つて、見てみい、ええ眺めや、と言つたんをいまだにおぼえてます。

はつきり突きとばす氣持になつたやいんやおまへん。手が勝手にひよいと動きそうになつたんやな。それもほんの一瞬間のことや。やっぱし氣配というものがありませんか、岡本がまたふり返りよつたんです。バナナが手に入ったんや。一本、茂二君にやるで。岡本の言つたそのことはまだようおぼえてます。バナナは修理に入つて来よつた潜水艦の乗組員から岡本が内緒でもろたもんらしいですけど、それでえらい儲けよつたという話をあとから聞きました。わてには、そのころ次男の茂二が肺浸潤やつて寝てましたんやけど、その子にやれというてタダでくれよつた。しなびて黒うなつてしまったバナナやつたけど、バナナはバナナや。まあ宝石みたいなもんでしやる。うちにもつて帰つてやつたら家中大さわぎになつて、茂二ばかりに食べさせるのもなんやというわけで、みんなで分け合つて食べた。一人あて小指の先ほどやつたけど、とにかくバナナや。春子がつくづく、岡本八んには足むけて寝られへん、と言いましたで。春子ばかりやおません、わてかてほんまにそないに思つた。

足場の上でとつさにふりむいたけど、岡本はわてが突き落そうとしたことは知らずにすんだんですや。岡本が控室においておきよつた特配のサケの罐詰五個がどこかへ消えてしまつて大さわぎになつたときも、岡本はわてにまるつきりうたがいをかけよらへんかった。ほんまを言つと、それかて

わてが持ち逃げしたんやけど、あれ、岡本はんがもう一ぺん特配もらおう思つて言いふらしてはるところが、とちがいまつか、と耳うちしてまわつたのもわてやつた。

そやけど、岡本は勤のええ男やつたさかい、みんな知つていて知らぬふりをしていたんとちがいますやるか。そんな気もしますねん。みんな知つていて、みんな岡本あつ子に教えて死んで行きよつた。実際、岡本あつ子が、おじいちゃんは、ええ人や、と言つてわてを見るたびに、しよつちゅうやないですけど、ときどき、この子は、みんな知つていて言うてるのやないかとそんな気にもなりますねん。

五

恥かしい話ですけど、そのうち、朝がたフトンのなかで岡本あつ子のことを考えるようになりましてん。夜はわてはすぐ眠つてしまいますよつて考えるひまなんかあらしません。朝は、さつきも言いましたけど、わては年寄りに似ぬ朝寝坊のほうやから、ぎりぎりの七時半までフトンのなかでウツラウツラしてますのや。日曜なんかそれが九時にも十時にもなつて元子に叱られるんやけど、そないしてウツラウツラしながら岡本あつ子のことをあれこれ考えてみるいうわけですな。と言つたかて、あの子の顔かたちがはつきりわての眼のなかに出て来るいうのんではないんでせ。もつとほんやりしたもんやな。もつとほんやりしてまるいもの、まんまるい、まるまるしたもんが出て来よつて、それが岡本あつ子なんやな。岡本あつ子のもんいうことが判つてるんやな。眼で見ているいうより、からだで感じとつてると言つたほうがよろし。メクラさんが何かものを見る、ものを考えるいうのはそんなふうなことやないでっしゃるか。まんまるいものには弾力があつて、指でポンとはじくとしなやか

にはね返つて来よる。あんまりすべすべはしていないし、白くもないんやけど、それでもそのまんま
るは若い女子おなこのまんまるやから、わてはフトンのなかでいつまでも相手にしているいうわけや。

いつか週刊誌見てたら、老人専用の秘密クラブがあるんやいうて出てましたけど、そういう話はほ
んまのことですしやるか。そこへ行くと、睡眠薬のませられて眠っているまつ裸かの処女が何人もい
て、お好みの女子おなこのからだに自由にさわる事ができるらしいですな。してはいかんことは女子おなことほ
んまに寝ることだけであとは何してもかまへん。まあ、そこへ行く年寄りにはみんなわてみたいにもう
アカンいう組らしいのやけど、会員制になっていよつてちよつとやそつとのことで会員にしてくれし
ませんのや。いろんな人が入ってるらしいです。大会社の社長はんもいれば歌舞伎のほうのえらい
さんも文化勲章をもらうようなえらい作家はんも会員やそうやけど、わてもときどき、そんなクラブ
の会員になってみたいと思いますねん。ゼイタクなことは言いませんで。そんなクラブやったら、き
れいな女子おなこそろえていはるんやろけど、わては岡本あつ子でよろし。白ブタはんでよろし。あの子の
まんまるを一日フトンのなかでさすつてみたいと、そんなことばかり考えながらウツラウツラしてま
すねん。

現物のまんまるはいつでもセーラー服姿か、色のあせたカーディガンにスカートいういでたちのま
んまるでしたけど、フトンのなかに出て来るまんまるは、はつきりは判らへんですけど、やっぱり、
着物着ていました。わては岡本あつ子に会つたばに、今度は着物着てくるねんぞ、とたのんだんで
けど、きょう日のことやから、なかなかそうは行きませんやろ。それでもいつぱんだけ、友達の誕生
日のパーティーの帰りやいうて着物で来よつたときがありました。化繊で見るからに安物の着物やつた

し、帯はこのごろ売ってます誰でも結べるいうふれ込みのインチキ帯やったけど、それでも、わてみたいな年よりは着物の女子おなこというのはよろしいもんでっしゃる、岡本あつ子のその姿が眼について離れませんか。フトンのなかまで入って来よる。

着物着て来よったときには何やうれしうなって、近くのスシ屋まで連れて行って、スシ食べさせてやっただんです。盛りあわせやのうて、ちゃんとにぎってもろうて食べたんでっせ。あんたのおじいちゃんおなこは「ひばりや」の女の人連れてよう桃谷駅前の「江戸前にぎり十円ずし」に行かはったらしいで、と言うと、そんなことまえから知ってた、そのことで、女の子にスシなんか食べさせて無駄づかいするいうて、ようお母ちゃんにケンカ売られてはったと岡本あつ子は笑い、好物やというタマゴ焼きを大きな口あけてどんどん入れて行きよったんやけど、さすがにまんまるの頬っぺただけあって、いくつでも入りますのや。呆れてしまいましたけど、タマゴ焼きをそんなふうにして頬ばる着物姿の女の子には、子供みたいに頬っぺたをぷうつとふくらましているというのに、へんに大人びた色気があって、わては食べるのをやめて黙って見ていて、おじいちゃん、どないしはったん、と言われたくらいでした。

「京都に連れてつたるか。」

わては思わずそう言うてしまいました。岡本あつ子は、そんなとき、すぐ、うれしいわ、行きたいなんて言いよりしまへん。まず、わざとぶつちよう面して黙ってますんやな。わてはしょうないよつてもう一度くり返すいうわけや。

「今度の日曜、京都に連れてつたるか。」

そないに二度ほど言つと、ちよつと、

「行つてもええ。」

と言いよる。わてはそないに言われると、べつに行つてもらわんでもええで、といつもどなり出しとつなるんやけど、岡本あつ子はわてのそんな気持の動きをよみとつとるのでつしやるか、もうそのときにはぶつちよう面をやめてニンマリ笑つていますんのや。それでわても何にも言えんようになる。そんなカケヒキはちよつと心にくいもんでした。

京都へ行くいうたかて、はつきり決めていたことやないんです。ただその日の朝がた、今度の日曜日は外出するいうて元子に言つてしもつてたんです。ことのおこりいうんは、元子が、今度の日曜日、妹の恵子の家にみんなして出かけるよつて留守番おじいちゃんたのみまつさ、と言ひ出したからで、それをもうそないなことにもとからきまつているような押しつけがましい口ぶりで言ひよつたんです。元子はいつでもそうですけど、日曜日どこかへ一家で出かけるとなると、留守番はおじいちゃんがやってくれるものとしてんから決め込んでいよるんですな。それがまえまえからシャクにさわつていたんで、わては、今度の日曜日は留守番でけへんで、とはつきり言つてやりましたんです。何でや、と言ひよるので、そないに言われたら、どこかへ行くいうて言わなしようありませんやないか、学校の用事で行くところあるんや、と出まかせを言つたんですが、さあ、そないになつて来ると、どこぞへほんまに行かなあかしません。それで、わてのまえでタマコ焼きを頬ばつている着物姿の岡本あつ子を見ているうちに、京都へ行つたるか、という気になりましてん。

京都には坂井いう男がいますねん。こいつにいつぱん会に行つたるかいう気がまえからしてまし

たんや。坂井いうたら、京都でフトン屋していた男で、わてが知り合つたんは坂井が徴用されて造船所へやつて来よつたときですけど、わてとおない年やつたもんやからわりと親しうしてました。顔色のわるい小さな男で、あんなやつに力仕事は無理ですわ。そやけど、岡本はそんなオッサンまでしこきよるんやな。日本は今何しとると思つとんのか、日本は今危急存亡のときである、われら産業戦士は……というようなことを大真面目で言いよつて、徴用工のオッサンをビシビシ使いよるんや。そら、会社のえらいさんが言いはんねんやつたら判りまつせ、そやけど、岡本が言うねんさかいこつちはブツと吹き出しとうなるのをこらえていたんですが。それでも当人はしごく真面目で、まあそのときだけ、会社のえらいさんが、監督に来てはる海軍の吉原はんになつた気でいよつたんとちがいますか。あないなこと言いながら、ナットやボルトの横流しに精出してたんやから、人間ちゆうもんはいろんなことやるもんですわ。それでも、あないなお説教しはりながら、ミナミのなじみの芸者衆を挺身隊員にして会社に連れて来はつたえらいさんほどのことはやってませんけどな。何とかいう駆逐艦がでて内輪のお祝いが工場であつたときにわてらもスルメとビール一本の特配にありついたので、お酌してまわりよつたんがえらくアカぬけしとりますねん。あれ何や、言つたら、おまはん知らんかつたんか、芸子はんがうちの会社に来てはりますねんやで、とこうですがな。モンペはいとるんやけど、やつぱしビールつく腰つき、手つきがちがいますねんな。その女子挺身隊員の芸子はんのほかに女の事務員もかり出されて来よつたんですが、そのうち、みんな、芸子はんの腰つき、手つきをまねし出しよつて、えらい色っぽいことでした。

徴用工ではつきりおぼえてるのは坂井ともう一人、朝鮮人の金という男ですわ。朝鮮人もようけ徴用

工で来ていて、「チョウウセン、チョウウセン」いうてバカにされて、「ニンニク組」いうてかげで呼ばれとつたんですけど、金はその「ニンニク組」の班長はんですわ。金何とかいうたんでっしやるけど、おぼえてしまへん。朝鮮人いうたらたいてい金か李か朴で、石投げたらそのうちの誰かに必ず当たるというんですけど、「ニンニク組」にはたしかにようけ金さん、李さん、朴さんがいはりましたで。みんなほんまにニンニク食うとつたんですやるな、金さんも韓さんも朴さんも臭うてかなわん。あれはええ薬やいうことで、朝鮮のお人が強いのはニンニクのせいやいう話きいたことありますけど、やっぱし、あの臭いはいやでんな。日本人の好みにはどうしてもあえへんのです。

みんなは「ニンニク組」は臭い言うていやがってましたけど、取り得は大力が多かったことで、力仕事で大いに助かりました。そこへもって来て、そのころ、こないな噂がありましたんや。造船所はまずまっさきに空襲にやられるはずやのに、ちょっとはしつこのところが爆弾でやられただけで助かった。それはどうしてや、「チョウウセン」がようけいるからやないかということと、これやったらもっと「チョウウセン」の数ふやしたらええやないかとみんなで言うてましてん。この噂はほら、「チョウウセン」がようけ住んでいる生野区はとうとう最後まで焼け残りましたやろ、そやよって、造船所のほうは六月の二回目の大空襲であらかた焼けてしまいいよったけど、あながち、まるっきりのウソではなかったとわては今でも思つてますねん。いっそ、「チョウウセン」の旗たてたらどうや、というこわいことまで言うてる人がいました。「チョウウセン」の旗て何や、そんな旗あるんかというて、たしかにあると言います。日本人がそないに言いよるので、おまえどこからそんな話聞いて来たんや、憲兵にひっぱられてしまつぞと言つと、金にきいて来たんやと言います。金て誰や、「ニンニク組」の班

長はんか。そつや。

その金なら言い出しそつなことですわ。まず、あいつはやり手や。やり手やよつて班長はんにまできなりよつたんやけど、日本人なんか屁とも思つてへんところがはじめからありました。と言つても日本人とケンカするのんやあらしまへんで。そんなケチくさいことはやりやらんです。日本人の言うこときいて、何でもやつてのけて、あいつがおらんと何にもことが片づかんいうぐらいにして、それで日本人を逆にふりまわすいうわけですな。岡本が「ニンニク組」に命令しても、「チョウセン」は、まあやりまつさ、というぐらいのことですわ。金が言うつと、そこがちがいますねん。シャキツとしてみんな一生懸命やりよる。からだも大きいし度胸もあるし、岡本がかつげんようなものでもヒョイと肩にのせよるし、まあ、親分ですな。その親分のことやから、平気で「チョウセン」の旗、あの占い師みたいな旗ですかな、その旗のことを言い出しよつたんかも知れまへん。

戦争が終ると、金はさすがに親分だけあつてみごとなもんでつせ。あとで聞いたことなんやけど、岡本つかまえて、いろいろお世話していただいてかたじけなかった、これからは、わたしらの世の中になつたんで、恩返しをしたい、困ることがあつたら何でも言うつて欲しい、とちゃんと岡本を上座にすえて言いよつたいうんですがな。もうそのころには金は鶴橋の闇市の親分になつていよつて、そのときにも、裏口営業していよつた今里新地の焼け残りの料亭に岡本を招いて言つたそうでつせ。それで岡本は、もうこんな鍋や釜やお寺の釣鐘なんかつくつている会社においてもしよつない決心して、会社をやめて金のとこへ行きよつたんです。わてもわてで、こつちは日本人やつたけど、親類に天六の闇市で羽ぶりきかせるのがいたのに年がいもなくまどわされてしもつてやめてしまいましたんや

けど、あとからなんでもうちよつと辛抱せエへんかったんやと何べんも思いました。

坂井の話をせなあきませんな。戦争終つてから坂井は京都へ帰つてまたフトン屋になつたんですけど、もう二年ほどまえのことになりますやるか、もう十年このかた連絡のとだえていたその男から手紙が来ましてん。返事出さんと放りっぱなしにしてしもたんですが、けつたいな手紙で、「貴方」いうのが「貴女」になつていたり、「です」が「ですの」になつていましたんやけど、きつと女の子に代筆させたんでつしやる。字かて下手で、岡本あつ子の字と大差ないよつて、代筆したんは若い女子やとわては思いましたんやけど、そないしてよんでいると、そのうち、坂井のそばにはきつとまだその若い女子はんがいはるにちがいない、坂井が入つたいうお寺に二人して暮していはるにちがいないと思えて来たんですがな。その女子は、元子やわての娘らみたいにきつい女やおません。もつとやさしうて、老人の心を知つた、いたわりのある女子はんや。そない思つてるうちに、わては自分が坂井になつたみたいない氣持になつて、手紙もつたまましばらくぼんやりしてました。

坂井はもうフトン屋は息子にゆずつて、京都の北のほうにあるお寺の世話になつていると言いはりませんや。息子に家督をゆずつてお寺に隠居するいうような話は今どき珍しい話で、そう言うからには家族と離れてその若い女子はんと暮しているいうわけですしやるが、手紙には、奥さんのことは何も書いてのうて、日本の造船業も世界一になつて慶賀の至りで、といううなわてらとなんの関係もないよつなことが長々と書いてありました。

今、坂井が住んでいるいう寺は、昔、座敷で斬りあいがあつて、そのときの血しぶきの跡が柱や天井に残つていてそれで有名なお寺やといふんですけど、そんな人のケンカのとなど今さら見ても

しょうありませんやろ。それをわざわざ見物に行く人もあるいうことでわてなんかには解げせんことやけど、もう一つ、その坂井の寺には面白いことがありましてん。手紙についてのことみたいになんかと書いてありましたことですけど、明治天皇のてかけはんの墓があるいうんですが。明治天皇のてかけはんいうたら十何人いはったんでっしゃろ、十何人のうちの七番目にあたる人　　なんで七番目なんか判りまへんけど、とにかく、その人の墓があります言いますねん。

明治天皇にようけてかけはんがいはるいう話聞いたのは、わてがまだ小学生のときで、あとでシベリアで戦病死しよった二番目の兄貴が教えてくれましたんや。どこまでほんまの話か知りまへんけど、十何人のてかけはんが、毎日、お茶を眼の高さに捧げもって並びはる。そこを明治天皇が通りはって、今夜はこいつやと思いなさったてかけはんのお茶碗をとりなさる。そのてかけはんが、夜、フトンのなかで天子はんとええことしはるねん、と兄貴は教えてくれたんですけど、わてはまだ小学校へ上ったばかりでっしゃろ、そのええことしはるといふことの中身が判りまへんがな。何や、何や、と訊いて兄貴困らせたことおぼえてます。それでも、その話だけは今でもようおぼえてるとこみたら、よっぽどびつくりしたんでっしゃろ。天子はんにてかけがいるいう話なんてはじめて聞いたんやさかい、無理もありまへんけどな。

戦争中に、その話、うっかりうちでしたことありますねん。とたんに、まだ中学一年生やった茂二がえらいこと怒り出しよりましたな、お父ちゃんは「非国民」や、「非国民」やさかい殴うつてええんや、いうてほんまに殴うりかかって来よった。あと二年したらすぐ予科練へ行くいうとったんが、戦争すんでちよつとしたら、共産党へ入りよった。天皇陛下のために死なんやつは「非国民」やいうてたんが、

天皇が日本を滅したんや言いよるねんさかい、ややこしい話や。今は私立の高校の教師して、事務員やった女子おなこといっしょになつて、もう三人目ができよるんちがいますか。

岡本あつ子に坂井のことを話したあとで、明治天皇のてかけはんの墓の話して、てかけの多いことはなんにもわるいことあらへん、男のカイ性のしるしや、となんにも弁解せんでもええことをわざわざ言つと、あの子は、うちかて負けんとうけボーイ・フレンドつくつたるねん、とえらく見当ちがいのことをいつも舌足らずの甘えた声で言いよつたもんですけど、あとで考えると、もうそのときにはいろんなややこしいことを始めていましたんやろ。

「その坂井の寺に行つてみたる思うてんねん。てかけはんの墓のお寺や。」

わては坂井と明治天皇のてかけはんの墓の因縁話をしたあとでそんなふうにしめくりをつけるように言い、岡本あつ子というような若い娘はんを連れて同じように若い女子おなこはんにかしずかれて暮しているにちがいない昔の友人に会うのもわるくない、えらい風流な話や、と柄にもないことを考えていましたん。

つづきは製品版でお読みください。